

連載

高大接続の課題に迫る

第1回

保護者の 大学へのニーズは どこにあるのか？

現在、中央教育審議会の高大接続特別部会で審議がなされるなど、高校から大学への接続が大きな課題となっている。そこで、本号から高大接続について、さまざまな観点から課題を探っていく。

第1回は「保護者」をテーマに取り上げる。大学にとって、保護者は最重要ステークホルダーの一人だ。大学は、保護者の意識も踏まえながら教育を組み立てるとともに、その本質的な提供価値について学生・保護者に分かりやすく発信する必要がある。このことは、学生募集という、高大接続の局面で保護者の納得感を高める意味で、今後より重要になることはいうまでもない。また、入学後、保護者の満足度も高める基礎となる。こうした視点に立ち、ベネッセ教育総合研究所が2012年3月に実施した「大学生の保護者に関する調査」からいくつかの特徴的なデータを用いて、まず保護者の大学に対する価値意識とニーズの在り処を探る。その上で、大学進学に係る親子のかかわりから、コミュニケーションの手立てについて考察する。

大学で子どもに力を入れてほしいのは、専門の勉強とともに「将来の生き方や進路を考えること」



ベネッセ教育総合研究所
高等教育研究室長
樋口 健

ひぐち・たけし◎民間シンクタンクで、教育政策や労働政策、産業政策等のリサーチ・コンサルティングに携わる。その後、ベネッセ教育総合研究所に移籍。大学教育を取り巻く諸問題に関する調査研究を続けている。

子どもの大学進学に対する保護者の基本的な価値観

最初に、近年の大学生の保護者が、子どもの大学進学に対して抱く基本的な価値意識はどのようなものか確認する。先んじて結論をいうと、そこには三つの特徴があった(図1)。

一つは大学生の保護者が共通して持つ、子どもの大学進学を率直に善きものと肯定し、期待する価値意識の存在である。実に9割弱の保護者が「大学で過ごすこと自体が子どもの人生経験として貴重だ」と考え、8割が「大学で学問に取り組めば自分の専門性を高めることができる」と考えている。これは保護者の学歴や大学の難易度によらず共通するものであり、大学進学の普遍的な価値といえるだろう。

二つ目は、「大学卒」の学歴の持つ価値の変化である。6割以上が「親の時代に比べて現在の大学卒の価値は低くなっている」と見るその一方で「これからの先行き不透明な時代は、大学くらい出ていないとやっていけない」との比率もほぼ5割に上る。学歴は決して将来を長く約束するものではなくなった。しかし、5割近くが4年制大学に進学する中で、む

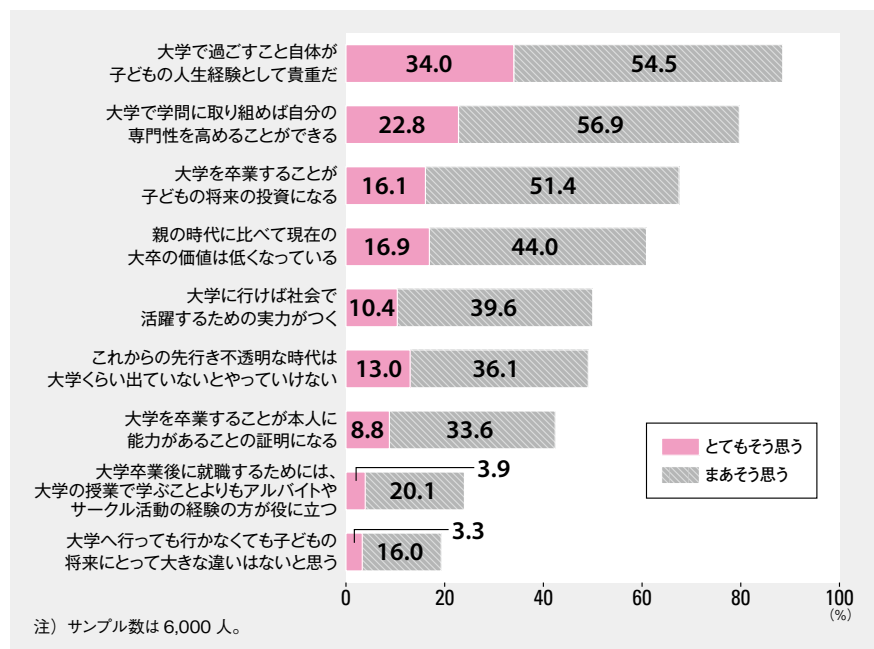
しろ「競争のスタートラインに立つパスポート」としての価値が高まる、新たな学歴主義の到来を示唆するものかもしれない。

三つ目は、大学教育が子どもの将来に果たす実的な価値への期待である。しかし、これについては、見方が分かれるようだ。「大学を卒業することが子どもの将来の投資になる」が7割と基本的な期待は高い。しかし、「大学に行けば社会で活躍するための実力がつく」「大学を卒業するこ

とが本人に能力があることの証明になる」との回答はいずれも半数程度である。期待の一方で、半数は大学での学びの成果の持つ社会的な価値について判断保留または疑問を抱いている。

こうして見ると、今日の保護者からは、大学進学が社会を生き抜く最低要件となりつつあればこそ、「大学での学び」という純粹で本質的な価値を非常に大事にしながら、同時に21世紀の将来社会に通用する力の育成を徹底して追求する、不易と流行の双方の価値を備えた教育が求められている。実際の大学での教育改革と受験生の保護者に対するコミュニケーションにおいては、この点を根底に踏まえた展開が求められるのではない。

図1 子どもの大学進学に対する保護者の価値意識



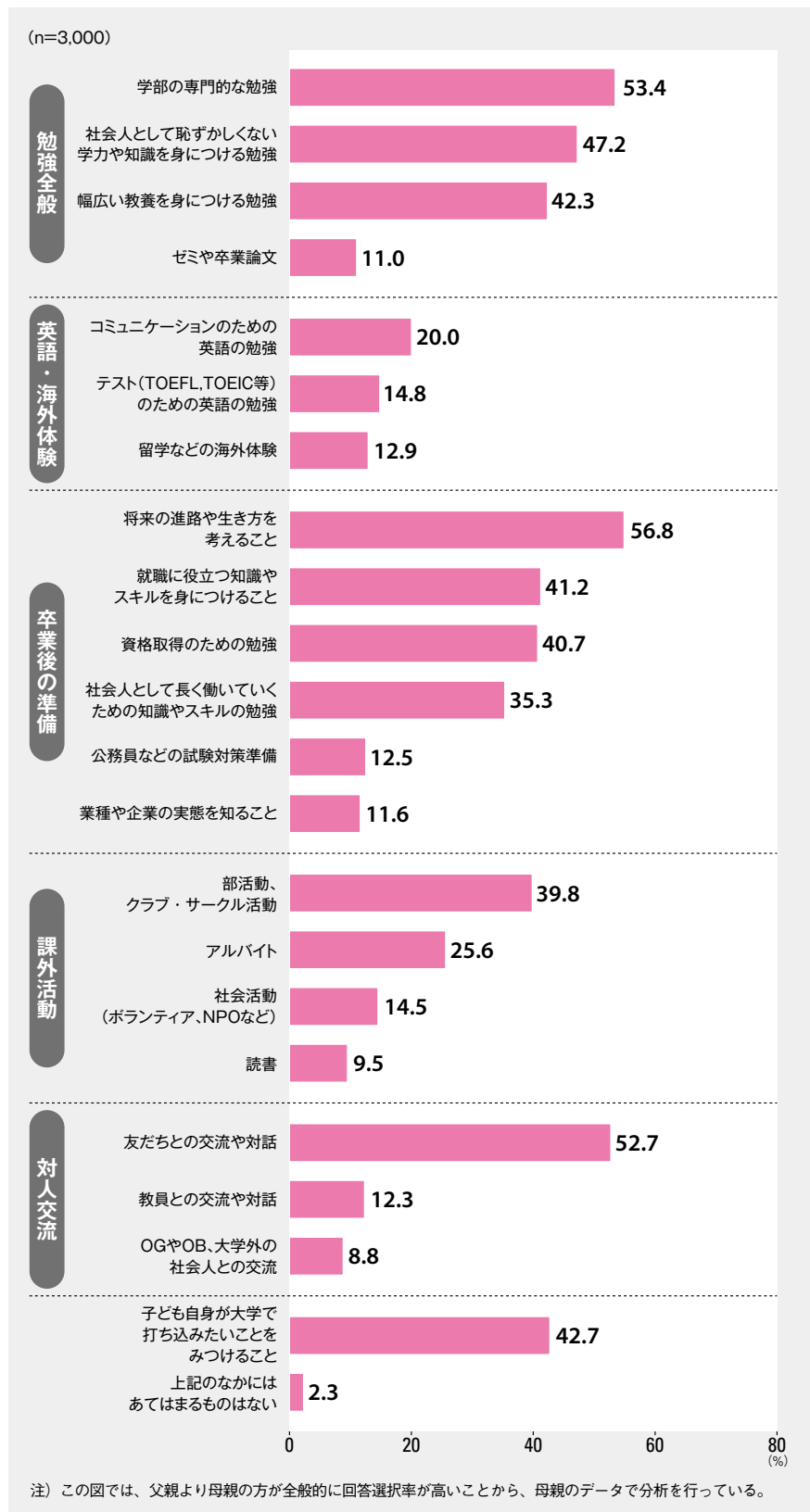
大学で子どもに力を入れてほしいことは何か

では、保護者は、子どもの大学入学に際して、具体的にどのようなことに力を入れてほしいと思っているのか。その実現は、まさに保護者の大学教育に対する本質的なニーズであり、教育を組み立てる重要な視点となるものだろう。図2は、子どもの入学時を振り返って、大学時代に子どもに力を入れてほしいと思っていたことを選んでもらったグラフだ（この設問では、父母の傾向は共通であるものの、一般的に母親の選択率が高く傾向が明瞭であることから、母親のデータを取り上げた）。

全体の傾向を見ると、最も比率の高いのが「将来の進路や生き方を考えること」（56.8%）であり、以下「学部の専門的な勉強」（53.4%）、「友だちとの交流や対話」（52.7%）と5割を超える項目が続いている。「社会人として恥ずかしくない学力や知識を身につける勉強」は47.2%と前記項目に次いで高く、保護者の中には、“学び”は子どもの“将来”の糧となるものであってほしいとの願いがある。「子ども自身が大学で打ち込みたいことをみつけること」（42.7%）との思いも強い。また図示はしていないが、これらは国公立の違いや大学の難易度などによらず、共通した傾向だ。

“学び”“将来への見通し”“よき友人”“充実した学生生活”は、保護者が子どもの学校生活に期待する普遍的な願いである。これらは先にも触れた、保護者が願う“貴重な人生経験を得る場としての大学”“専門性を高める場としての大学”など、大学の普遍的な価値と呼応したものであ

図2 入学時を振り返って「大学時代に力を入れてほしい」と思っていたこと（母）



出典/ベネッセ教育総合研究所「大学生の保護者に関する調査」(2012年3月)。全国の大学生1~4年生の子どもをもつ保護者6,000人(父親3,000人、母親3,000人)に対するインターネット調査。詳細は右記をご覧ください。ベネッセ教育総合研究所高等教育研究室 <http://berd.benesse.jp/koutou/research/>

り、保護者に対するコミュニケーションの中で備えるべき基本要素となるものだろう。

次に、同じ設問について学部系統別に見てみる(図3)。ここでは代表的な四つの学部系統を取り上げたが、学部系統の特徴と気になる傾向が示された。

まず「理工」「医・薬・保健」については、「学部の専門的な勉強」が最も高く、それぞれ66.7%、69.2%であるが「人文科学」「社会科学」では、それぞれ48.8%、41.0%である。それを上回り最も高いのが「将来の進路や生き方を考えること」(59.6%、55.2%)であった。二つの文系学部系統では、他の理系学部系統と異なり「学部の専門的な勉強」よりも「将来の進路や生き方を考えること」に期待されている。キャリ

ア教育と専門教育をどのように統合していくかは、保護者の理解を得る上でも今後の重要な課題といえる。

ここで特に気になるのが、社会科学系統だ。同系統では「学部の専門的な勉強」が41.0%であるが、比率の高い順から数えると第8位である。一方「社会人として恥ずかしくない学力や知識を身につける勉強」52.5%より10ポイント以上低く、学部の専門に関する学びと、社会に出るために最低必要な学びとが、切り離されて認識されている可能性がある。また、「部活動、サークル活動」43.0%よりわずかに低く、大学生活全体の中での優先順位も高くはない。社会科学分野の大学教育の価値と信頼を高める上で、筆者はこの事実を克服すべき課題と捉えている。保護者の社会科学系統に対する固定的な

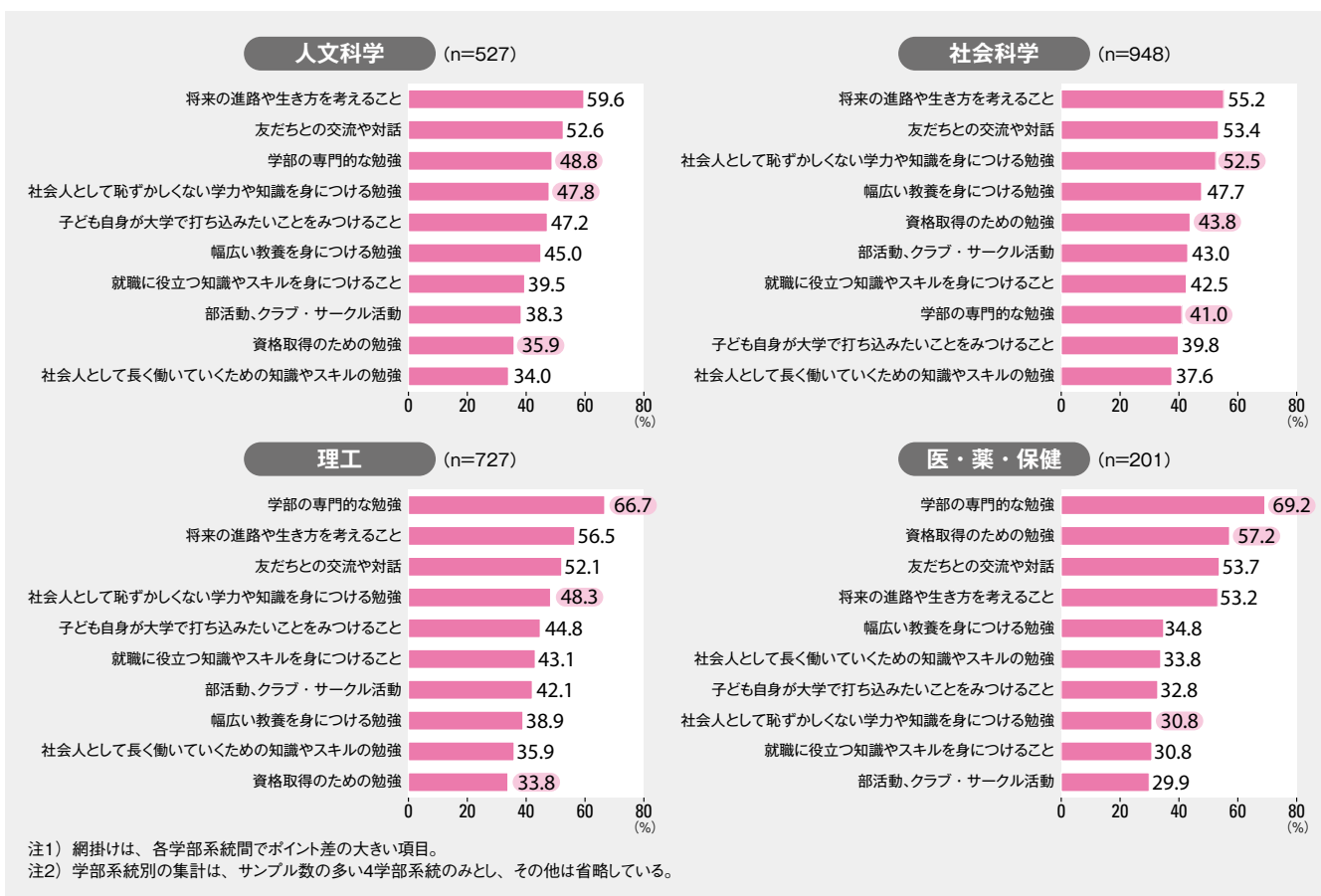
認識を変えるべく、どう教学改革を進め、コミュニケーションするのか、戦略的な対応が求められている。

「受験生の母」は大学と受験生・家庭を結ぶ重要チャネル

次に、子どもの大学選びにおける保護者関与の実態から、コミュニケーションの仕組みについて考えてみる。

大学選びにおける保護者の関与についてみると、全体としては「大学に行くメリットを子どもに伝えた」「大学卒業後の職業や目標を、子どもに意識させるようにした」「将来の職業と結び付けて大学や学部を選ぶように、子どもにアドバイスした」が父・母ともに上位に位置している(図4)。そこには、子どもに“大学進学”の価値意識と将来的な観点からの目標感を持たせたい”との保護者の切なる

図3 入学時を振り返って「大学時代に力を入れてほしい」と思っていたこと(母、学部系統別)



思いをうかがうことができる。こうした、大学選択に係る親子のコミュニケーションの中に有効に位置づき、活用される大学ごとの情報提供ができれば、それは大学選択プロセスでアドバンテージを得るための方法とはならないだろうか。

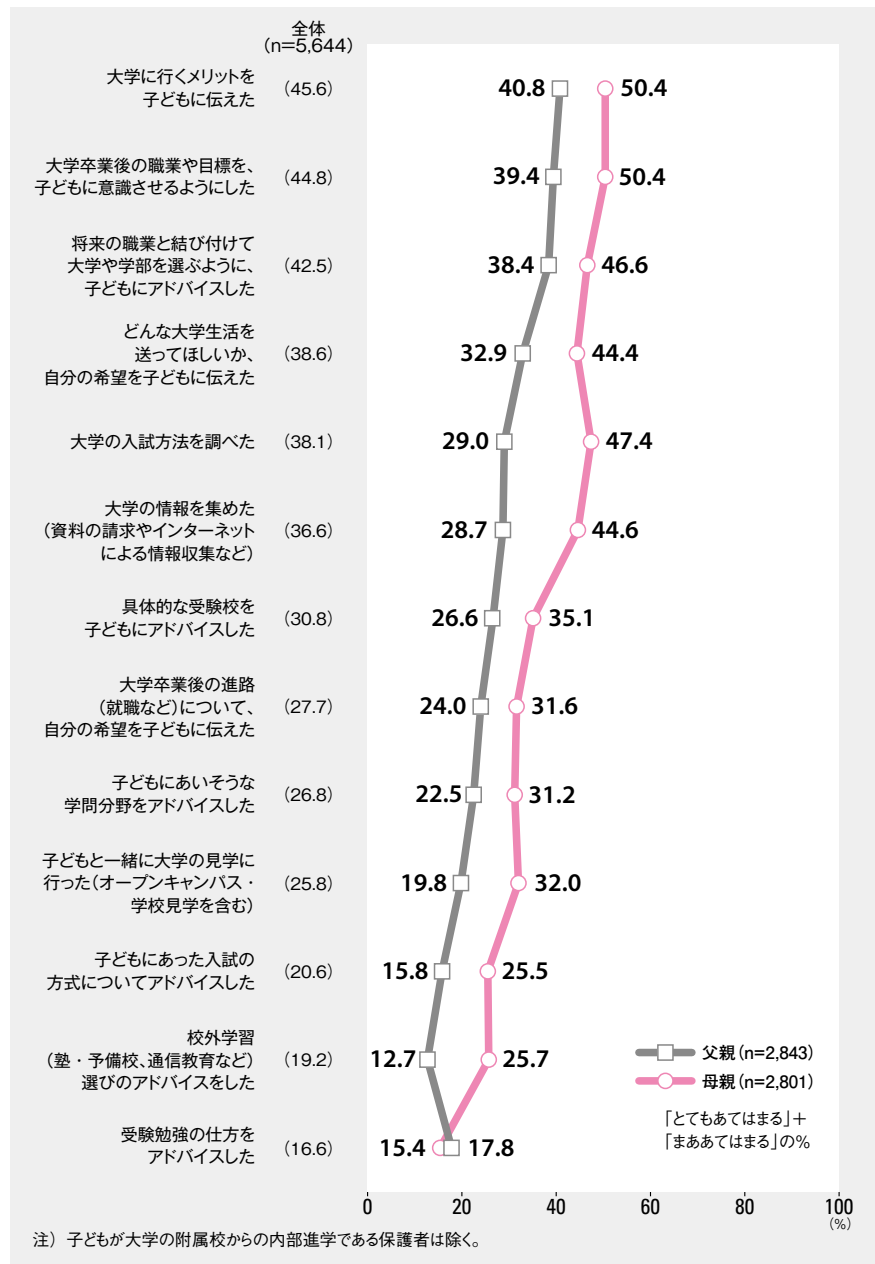
家庭に提供する情報の具体的内容は、大いに検討の余地があるが、情報を届ける人的チャネルとして母親の重要性を挙げておく。母親は、大学選びのプロセスで父親よりも実にさまざまな面で子どもにかかわっている。中でも強いのが、大学選択のための情報収集面なのである。具体的には「大学の入試方法を調べた」「大学の情報を集めた（資料の請求やインターネットによる情報収集など）」「具体的な受験校を子どもにアドバイスした」「大学卒業後の進路（就職など）について、自分の希望を子どもに伝えた」「子どもと一緒にならぬ学問分野をアドバイスした」「子どもと一緒に大学の見学に行った（オープンキャンパス・学校見学を含む）」等で父親に比べて母親の関与が顕著だ。また、図示はしていないが、とりわけ子どもが女子の場合「子どもと一緒に大学の見学に行った」母親は47.9%と、ほぼ半数に達している。オンラインでもリアルな場でも、母親は重要なチャネルとなり得る。

就職面など母親のさまざまな関心事に応えつつ、大学独自の価値をどう伝え、理解を促すのか有効な方法の開発と実践を期待したい。

終わりに

冒頭で、保護者が子どもの大学進学に対して抱く基本的な価値意識を見た。例えば、「大学で過ごすこと自体が子どもの人生経験として貴重だ」といった、普遍的な価値意識の存在である。では、具体的に大学生の「貴重な人生経験」を大学教育の中でどうすれば創出し、展開できるのだろうか。ここには王道はなく、例えば、この普遍的で正解のないテーマを「保

図4 子どもの大学進学における保護者の関与（父母別）



護者のみならず、学生、大学・高校の教員、産業界などステークホルダーが会して、胸襟を開いて深い部分で相互対話する場”を創設する。こうした場を、大学教育のPDCA*の中に織り込み、地道に積み重ねていくことに尽きるのではないだろうか。そこから、大学とステークホルダーの間に共通目標と相互連帯が生まれ、今日の若者の状況に即して、高校から大学、そして社会へと続く、信頼性・

妥当性の高い教育が設計できる。また、こうした取り組みが、現在、十分に出来ているだろうか。

本稿では、高大接続の課題を解決するため、大学進学に際しての保護者のニーズ把握とコミュニケーションのあり方について述べてきたが、それが形式的であってはならない。

最後にこの問題を克服する実践として、対話の場の重要性を提起した次第である。

* Plan (計画)、Do (実行)、Check (点検)、Action (改善) の頭文字を取ったもので、業務改善の有効な方法の一つ。